

# チームの探検をネットワークでサポート!アクティブ修学旅行

宝仙学園小学校 学年主任・算数科主任 蒔田 紀彦, 研究主任 加藤 朋生, 社会科主任 鴻巣 将一郎

キーワード: 宿泊行事, フィールドワーク, ネットワーク, チームビルディング, リスクマネジメント, PBL

## 実践の概要

複数のアプリを活用し、ネットワークを構築することで、安全に留意しながらも、子どもたち一人ひとりに最適化された主体的な旅が実現可能となった。GIGAスクール構想の先駆けとなり得る未来のアクティブな修学旅行を目指した実践である。

### 1. 目的・目標「学び多き修学旅行をデザインしたい」

私たちが子どもの頃から経験してきた宿泊行事の多くは、「教師によってスケジュールが生まれ、みんなで同じ場所に、同じタイミングで出かけて、同じ体験をする」というものが主ではなかっただろうか。本当に主体的な宿泊行事を目指すには、一人ひとりの多様性を大切にしたい。アダプティブな旅程をつくる必要があると考えた。つまり、各々が設定した研究テーマに基づいて、最適な行き先やルートを計画。タイムマネジメントも自ら行うことが必須である。しかし、実現のためには乗り越えるべき3つの課題がある。

- ① どのように、子どもたちが設定した見学地やルート、時間配分を教職員が把握するか
- ② どのように、現地活動中の児童の安全を確保するか
- ③ どのように、チーム間を連携させるか

ICTを活用することで子どもたちと引率教員の間でネットワークを構築し、上記3つの課題の解決を図った(図1)。

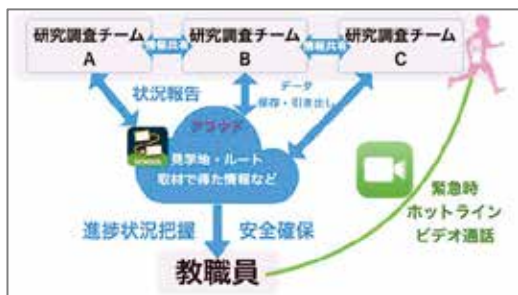


図1 児童-教職員間のネットワーク

## 2. 実践内容

### 2.1 子どもたちが設定したルート、時間配分などの情報を一元管理

個人の活動になればなるほど苦勞するのが、子どもたちの学習の進捗状況を把握することだ。6年児童数は、73人。もちろん一人ひとり興味・関心は異なる。テーマの関連し合う児童同士で、19のチームに分かれた。行動範囲は長崎市全体。全てのチームの行動を把握するために、児童の情報をロイロノートで一元管理した(図2)。データはクラウド上に保管されるため、全教職員が子どもたちの計画を容易に把握することができた。また、児童同士の情報も共有し合い、他のチームの計画も見ながら自分たちの旅程をブラッシュアップしていった。さらに、児童が取材によって得た資料もロイロノートを通して、クラウド上に保存をすることで、散逸も防ぐことができた。



図2 児童の計画の一元管理

### 2.2 クラウドでの情報共有と

#### ビデオ通話による緊急時ホットライン

各々がルートを設定する校外学習は、中高生にとっては決して珍しいものではない。しかし、小学生にとっては大冒険。未だ見ぬ土地を丸一日歩き回するには、安全確



図3 旅程ルートマップ

図4 一次情報記録

項目	内容	備考 ☆ICTの活用(本紙掲載事項は太字)
1次	事前学習	長崎新聞社と本校をつないで、取材のための事前学習を行った。
2次	研究テーマ設定	長崎についての情報を集め、自分の興味のある分野を選択。
3次	チームづくり	興味の近い人とチームを組んだ。
4次	見学コース設定	実際の地図データに見学スポット情報を書き込み、ルートを設定。(図3)
5次	修学旅行本番	現地へ出かけて、体験。
6次	学習報告	長崎新聞社とのタイアップ企画。新聞記事を実際に行った。(図9)

保が欠かせない。今回構築したネットワークには2つの安全確保機能を持たせた。一つは、目的地に到着したら、ロイロノートで教員や周りの児童とセルフィー写真を共有するシステム。

写真には、現在の居場所やコメントを載せて送る工夫をした。Instagramのような感覚で子どもたちも喜んで近況報告をした(図5)。



図5 児童からの進捗状況報告

もう一つは、緊急で対応するシステムだ。Face Timeを活用してリアルタイムで教員とビデオ通話ができるネットワークを準備した。子どもたちだけで解決の難しい問題は、教員がサポートする。常に児童が安心感を持って挑戦できるよう配慮した。

### 2.3 情報共有スペースの作成

SNSのタイムラインに着想を得て、研究調査中に見つけた、他のチームへ知らせたい情報を共有できるスペースも用意した(図6)。自分の研究テーマを探究しながら、他のチームに思いを馳せることで、協働学習の機会が広がった。

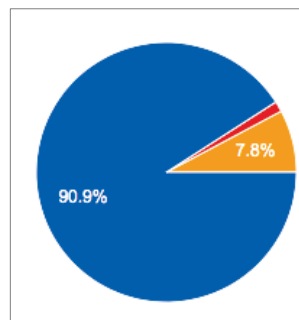


図6 他チームとの情報共有スペース

## 3. 成果

日本中の学校で行われている修学旅行をアップデートできる。ICTを工夫して活用すれば伝統的に行われてきた学校行事が新しい意味を持ち始める。用意するツールは1グループに1台のiPadと、ネットワーク構築に必要なアプリ2つのみ。ロイロノートは、普段授業で活用している学習支援アプリだ。子どもたちにとってもハードルは低い。Face TimeはiPadに元々インストールされている純正アプリ。日本中で行われている行事に日常的に活用するツールを掛け合わせたことで、普及性の高い実践となった。また、社会科見学や地域貢献のような宿泊を伴わない校外学習や課外活動にも応用ができる。子どもたちの行動範囲とフィールドワークの可能性が広がる。

私たちはこれまで、2年かけて遠足登山や地方での林間学校などで同じような取り組みを積み重ねてきた。その都度、安全性の高さとリスクマネジメントを保護者や他の教職員に伝えてきた。最初は不安の声もあったが、今では「このようなリアリスティックな体験をどんどんさせてほしい」という声も多くなった。多くの子が、自己実現できる学習を今後も続けていきたいという感想を持った(図7)。



自己実現できる学習を今後も続けていきたいという感想を持った(図7)。

図7 今後もこのような活動をしたいですか

「先生の手を借りず、自由にやったり、自立できたりする感じがするから」「自分たちで考えたというだけでやる気がわいてくるし、友達との距離も縮まると思うから」などと理由を語る子どもも多いた。また、「修学旅行を経て、以前よりも成長したと思うこと」(図8)には、「人へ対する気持ち」「友達と一緒にいてより楽しいと思える」「急な計画変更でも臨機応変に対応できる」などが挙げられた。



図8 修学旅行を経て成長したと思うこと

## 4. 今後に向けて

今回は、長崎新聞社の協力を得て取材が実現した(図9、10)。現地スタッフの力を借りることで、豊かな体験が可能となる。今後は、現地に貢献するストーリーを子どもたちがデザインしていくことでいっそう充実していくと考える。さらに、ICTならではのアウトプットの工夫もできそうだ。GIGAスクール構想に向けて、さらにアクティブで一人ひとりが充実感を得られる活動が生まれるよう努めていきたい。



図9 成果物の記事



図10 長崎新聞 2019.6.24